様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１３１４２

研究課題名（和文）「夢の構造分析」に関する発達的・比較文化的・心理臨床的研究

研究課題名（英文）Developmental, cross-cultural, and clinical-psychological research on "structural dream-analysis"

研究代表者
田中　康裕（Tanaka, Yasuhiro）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：４０３３８５９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：従来の夢の研究では、量的にも質的にもその「内容」に焦点が当てられていたが、本研究では、その「構造」に注目した。日本の大学生を対象とした夢と自己意識に関する調査を実施することで、自己意識の在り方が夢の構造にも反映されていることが明らかとなった。また、外国人共同研究者との日独の心理療法事例のなかで報告された夢の検討を行うことで、夢の構造それ自体や心理療法過程において特定が夢が報告される時期に文化差があることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、夢の「内容」ではなく、その「構造」に新たに注目したことは、その学術的意義が高い。また、大学生を対象に調査を実施することで、自己意識の在り方が夢の構造にも反映されていることを明らかにしたことは、本研究の学問的成果である。加えて、外国人共同研究者との共同研究を通し、夢の構造それ自体や心理療法過程において特定が夢が報告される時期に文化差があることが確認されたことは、国際比較研究としても意義あることと考える。現代における青年のメンタリティーの変化や日本人のメンタリティーの独自性についてはよく話題になるが、実証的な手法でこれらにアプローチしえることを示した点に本研究の社会的意義はある。

研究成果の概要（英文）：Although conventional researches on dreams have mainly focused on the “content” both quantitatively and qualitatively, in this study, the "structure" was focused. By so doing, it was made obvious that the psychic structure of young people today was reflected in the "structure" of their dreams by administering a questionnaire of their dreams and self-consciousness to university students. In addition, through the joint research with a German researcher, the "structure" of dreams and the phase in which a certain type of dreams were reported in psychotherapy were of difference between German and Japanese clinical cases.

研究分野：臨床心理学

キーワード：夢分析　心理療法

１．　研究開始当初の背景

わが国においても、夢内容に関する調査は早くから様々な形で行われており（北見, 1957-9; 河合, 1975; 鑪, 1978 等）、また、事例研究という形でも、学派の別を問わず、クライエント理解を深める、あるいはセラピーを進展させる一つの媒体として夢が用いられた事例は、数多く報告されている（河合, 1974; 名島, 1978; 鑪, 1984 等）。

ただ、このように、夢が夢見手の内的世界の何らかの表現であることは、多くの心理臨床家に以前から共有されてはいたが、夢内容に関しては、北見の「定型夢」の研究以来、個人のそれぞれの発達段階に定型的に報告される夢があり、そこには各発達段階の心理的特徴が反映されているということ以上は、何も実証されていないのが現状である。筆者ら（1992/1993）の「印象夢」に関する一連の研究でも、「最も印象深い夢」を見たとして報告される年齢（「夢見年齢」）と不安意識との間に一定の相関は見出せたが、夢内容自体については確たることは実証しえなかった。

２．　研究の目的

このような現状・経緯も踏まえ、本研究では、夢の心理学的本質にアプローチするに際し、Roesler（2018a）の「夢の構造分析」を出発点として、夢の「内容」ではなく、その「構造」に着目する。そして、その際、最も注目するのが、夢における「自己関係」の在り方である。Jung（1917）による夢の「主体水準の解釈」という考えからもわかるように、事物も含めて夢に登場するもの（「他者」）はすべて、その夢見手の心的構成要素であり、「自己」であるとも言える。このような見方をすれば、夢に主として表現されるのは、その夢見手と自分自身の要素であるものとの「自己関係」の在り方であり、その諸相や変化に着目することは、夢の「構造」を分析するに際しては当を得ていると言えるだろう。

３．　研究の方法

先述の通り、従来の夢についての研究は、量的にも質的にもその「内容」に焦点が当てられていたが、本研究では、その「構造」に注目することから出発した。外国人共同研究者でもある Christian Roesler の「夢の構造分析」は手続きがやや複雑であったため、申請者らは、それに代わるものとして、夢のなかの「自己関係」、「夢自我」の「他（者）」との関係に焦点を絞ることとした。日本の大学生を対象とした夢と自己意識に関する調査を実施し、上記の夢のなかの「自己関係」に関するチェックリストを作成し、現代の大学生の夢のなかの「自己関係」と自己意識の関連について国内外の学会で発表を行い、それを「夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連」として投稿し採択・掲載された（研究Ⅰ）。また、上記の Roesler 教授の日本滞在中に、日独の心理療法事例のなかで報告された夢の検討を行い、「夢自我」の「他（者）」との関係についてさらに洗練された 5 つのパターンを析出し、比較文化的な視点から考察を加えた。最終年度には、この研究の総括を行い、その成果は、"Differences in dream content and structure between Japanese and Western dreams"として投稿した（研究Ⅱ）。加えて、上記の現代の大学生の夢のなかの「自己関係」と自己意識の関連についても、比較文化的な研究へと拡張し、海外の大学生に対してまだサンプル数は少ないが、SurveyMonkey を用いて調査を行った。その成果は、今夏に開催される International Association for Analytical Psychology の大会で発表予定である。

４．　研究の成果

（1）研究Ⅰ　夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連

＜調査の概要＞

調査対象：関西地方の A 大学の大学生を対象に調査を実施した。回答数は 230 名、そのうち有効回答は 212 名であった。

調査時期：2016 年 1 月に実施した。

質問紙の構成：質問紙は、夢に関する質問項目・対人恐怖心性尺度 (堀井, 2012)・自己感尺度 (松岡, 2015) から構成した。夢に関する質問項目では、「子どもの頃に見た印象的な夢」と「最近見た印象的な夢」の内容、各夢を見た時期、当時現実に起こっていたことについて、自由記述で回答を求めた。自己感尺度 (松岡, 2015) は、Stern の乳幼児研究に基づく自己感理論を一部修正し、青年期の自己感を多面的に測定できるよう作成されたもので、夢見手の自己感の様相を調べるために用いた。また、対人関係に関して悩む程度をはかる対人恐怖心性尺度 (堀井, 2012) を用いることで、夢見手の「不安の器」の脆弱さ、「悩めない」心性の程度を調べた。

＜結果の分析＞

まず、回答者を、尺度得点の平均点を基準に低/高得点群 (以下、低/高群と表記) に分類した後、両尺度の低/高群の組み合わせから 4 群を構成した。4 群の人数比は、図 1 にまとめた。

次に、各群の「子どもの頃」「最近」の夢の特徴を、夢の「構造」に関する、私と他 (者)との関係のあり方、私の行為主体感の程度、夢の中の場所・時間・私の視点の連続性の 3 点に基づき比較検討した。3 点に含まれる詳細なチェック項目は表 1 に示した。

図１

表１　夢の「構造」に関する３つの観点と含まれるチェック項目

夢の「構造」に関する3つの観点	夢の「構造」に関する3つの観点に含まれるチェック項目
夢の私と他（者）との関係のあり方	私からの働きかけか，他（者）からの働きかけか
	私と他（者）の双方向のやりとりが成立しているか（双方向のやりとりの成立，私と対象のどちらかしか存在しない）
	他（者）の働きかけの質（直接性，予測不能性，友好性の程度）
	私が主導権を持つか，他（者）が主導権を持つか
	私にとって困難な状況が発生するか，困難状況で主導権を持つものがいるか
夢の私の行為主体感の程度	私が意図を持つか，意図を持つ場合は実際の行動にまで移されるか
	私の主体的対処の程度（私の主体的対処がある，私が対処・反応しようとしない，私は受身的に対処を行う）
	私の行動の自発性の程度（私が私自身の行動をコントロールできない，私が未然に対処を行う）
	私の行動の結果（私の対処は有効か，失敗か）
	私の情緒の安定性（私の情緒の揺れの程度，私の葛藤の程度，私の葛藤の持続性）
場所，時間，夢の私の視点の連続性	場所に連続性があるか（私・対象・場の境界の曖昧さ，対象の状態の不連続性，対象の実体の明瞭さ）
	時系列に連続性があるか（夢の出来事が起承転結を持つか）
	私の視点に連続性があるか（私の主観的な描写がある，私が詳細に場面を把握する，私の状態に不連続性がある）

＜結果と考察＞

自己感低群と高群では、構造面で夢の特徴が大きく異なることが示された。自己感は私の振舞いだけでなく、夢の中で出来事が展開する土台となる場所・時間・私の視点の連続性にも影響を与えており、自己感の様相の違いは、夢の構造の多様な側面に反映されると考えられる。また、自己感は対人恐怖心性よりも夢の構造との関連が強く、「子どもの頃」の夢と「最近」の夢で、自己感と関連した夢の構造の特徴には大きな変化は見られなかった。成長しても自己感に基づく体験世界の構造は強固に維持されると考えられているが (Stern, 1985) 、今回の結果からは自己感と関連した夢の構造の特徴も大きくは変化しないことが推察された。

また、「自己感の様相と夢の私の葛藤の関連」については、以下のことが考察された。

まず、自己感低群の夢の特徴としては、私と対象の双方向の関わりの生じにくさ、私の葛藤の持ちにくさがあげられた。一方、「子どもの頃」と「最近見た」夢を比較すると、「最近見た」夢では困難状況や私の葛藤が生じ始めており、これは注目すべき点である。これに対して、自己感高群の夢は、起承転結を持ち、私の一貫した視点から語られる点では、従来的な夢と類似した特徴を持つものの、「子どもの頃」の夢では私の葛藤の持続しにくさが自己感低群の夢と同様に見られた。不安の器が育ちにくく、悩めないという現代の若者の心性は、自己感高群の夢にも窺えるが、「最近」の夢では私の葛藤の持続について変化が生じていることが推察された。

（２）研究Ⅱ　日本人と西洋人の夢内容と構造の差異

＜研究の概要＞

ドイツの 11 事例(140 の夢) について夢の構造分析を実施する中で、全事例の夢は、非常に限られた夢の構造のパターンに高い確率で分類できることが明らかになり、夢の構造の典型的なパターンとして、以下の主要な 5 つのパターンが抽出された（Roesler, 2018b）。

Ⅰ. 夢自我は夢の中には存在せず、夢見手はただ場面を観察している。
Ⅱ. 夢自我は攻撃されたり、傷つけられたりして、脅威にさらされる。
Ⅲ. 夢自我は、夢の中の対象からの要求と向き合う。夢自我は、何かを探すこと、何かを対象に

与えること、何かの課題を達成すること、などを求められる。このパターンの最も典型的な状況は、試験である。
Ⅳ. 移動の夢。夢自我は、旅行や特別な目的地に向かうなどで移動中であり、その際に様々な移動手段を用いる。
Ⅴ. 社会的に交流を行う夢。夢自我は、夢の中の対象との接触、コミュニケーションを試み、それに専心している。このパターンでは、社会的な関わりに焦点が当たっている。

各パターンの夢自我と対象の主導権のバランスには、以下の傾向が生じた。まず、パターンⅠでは、夢自我は全く現れなかった。パターンⅡとⅢでは、夢自我は存在するものの、対象の圧力の下に置かれており、主導権も夢自我ではなく対象が持っていた。そのため、夢自我は対象の振る舞いや、対象からのコントロールに従わされていた。パターンⅣとⅤでは、夢自我は主導権を持ち、個人の計画を実現しようとするが、困難にぶつかることもあった。

これら 5 パターンの出現率を、夢が心理療法過程で取り上げられた日本の 13 事例(168 の夢)について検討した。加えて、ドイツの 11 事例と日本の 13 事例の各パターンの出現率が比較され、その異同が検討された。

＜結果と考察＞

日本の 13 事例を分析した結果、ドイツの 11 事例の結果から典型的な夢の構造のパターンとして抽出されたパターンⅠ~Ⅴは、いずれも日本の事例でも生じることが明らかになった。異なる文化的背景を持つ事例でも、パターンⅠ~Ⅴは同様に出現したことから、この 5 パターンは夢系列に生じる典型的な夢の構造として検討し得るものと思われる。

また、Ⅰ~Ⅴのパターンの出現率には、有意差が認められ、“夢の私が脅威にさらされる”パターンⅡは、両国の事例に共通して多く出現していた。パターンⅡで私に脅威を与える対象は、自我にはまだ異質性が強い、嫌な気持ち悪いイメージで現れることから、クライエントの心理的課題や、受け入れがたい自身の人格の一側面が反映されたイメージとして捉えられる。パターンⅡでは、これらの心の領域から脅威となるかかわりを受け、夢自我は自身の心理的問題と直面させられるが、それは他の心の領域との関わりが生じる契機ともみなすことができる。他の心の領域が含む、夢見手の潜在的な可能性を含む側面との関わりが生じることは、夢自我の強化と成長に繋がると考えられるため、パターンⅡは、ドイツと日本の事例の双方で、典型的な夢の構造のパターンとして、心理的テーマの展開に重要な役割を担っていたのではないかと思われる。

一方で、各パターンの出現率にはばらつきが生じていた。心理療法過程で生じる夢は、心理的テーマへの気づきをもたらすなど、夢見手にとって印象深く体験されて報告される場合が多いと考えると、出現率の高いパターンは、特にクライエントの心理的テーマの展開に意味をもった夢の構造と捉えることができる。日本の事例では、“夢の私が要求される課題をこなす”パターンⅢが、ドイツの事例では、“夢の私が移動を試みる、可動性を増す”パターンⅣが多く、この二つは、日本、ドイツのクライエントにとって、それぞれ特に意味のある夢の構造と考えられる。

このことは、ドイツの事例は明確な自我が主導し、私が独立して心理的テーマを進めるのに対し、日本の事例では、夢のなかの対象との関わりのなかで夢自我が心理的テーマを進め、対象の側も役割をもって夢自我の心理的テーマへの取り組みに関与するのではないだろうか。また、パターンⅢが対象との関わりの中で生じる状況では、私の前に、対象が傷ついたり困ったりした状態で現れることで、私の内発的な助けを促すようなあり方が特徴的な夢も多かった。ここにも、夢の中の対象の姿で現れる、他の心の領域と、自我の関係のあり方が影響しているように思われた。

今後の研究に向けて

研究Ⅰに関して言えば、調査対象国をさらに広げ、夢の構造と自己意識の関連について、比較文化的な研究をすることが必要である。まだサンプル数は少ないが、現時点で得られている結果からも、西洋と日本の大学生では、自己感の在り方が相当に異なり、夢においても、日本人の夢に典型的に見られるように、場面が切り替わるのではなく、実際に移動が行われる等、興味深い違いが見出されている。発達的な観点については、「子どもの頃」と「最近」の印象的な夢を比較するに留まっており、実際に中高生にまで範囲を広げた調査を今後は進めてゆく必要があるだろう。

また、研究Ⅱについても、本研究では、日独の心理療法事例で報告された夢の比較に留まったが、そこから得られた、“夢の私が脅威にさらされる”パターンⅡは、クライエントの文化的背景に左右されにくく、基本的な夢の構造のパターンとして心理療法過程で生じている可能性があるという知見からは、それは他の国の事例にも共通しているのか、また、他の国ではどのようなパターンが特有であるのかをさらに検討してゆかなければならないだろう。

５．　主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① 粉川尚枝・松岡利規・田中康裕・河合俊雄・畑中千紘・梅村高太郎 (2018). 夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連．箱庭療法学研究第 31 巻 2 号, 3-17.

〔学会発表〕（計　2 件）

① Hisae Konakawa, Toshio Kawai, Yasuhiro Tanaka, Toshiki Matsuoka, Chihiro Hatanaka, Koutarou Umemura (2016). The relationship between sense of self of dream I and the structure of dreams. In: Academic subcommittee meeting, XX International Congress of Analytical Psychology. August 30th, 2016 (Kyoto, Japan). 口頭発表

② 粉川尚枝・松岡利規・田中康裕・河合俊雄・畑中千紘・梅村高太郎（2016）．夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連．一般社団法人日本箱庭療法学会第 30 回大会．2016 年 10 月 16 日（帝塚山学院大学）．口頭発表

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．　研究組織

（１）研究分担者

研究分担者氏名：河合俊雄

ローマ字氏名：KAWAI, Toshio

所属研究機関名：京都大学

部局名：こころの未来研究センター

職名：教授

研究者番号（8 桁）：30234008

研究分担者氏名：畑中千紘

ローマ字氏名：HATANAKA, Chihiro

所属研究機関名：京都大学

部局名：こころの未来研究センター

職名：講師

研究者番号（8 桁）：30532246

研究分担者氏名：梅村高太郎

ローマ字氏名：UMEMURA, Kotaro

所属研究機関名：京都大学

部局名：大学院教育学研究科

職名：講師

研究者番号（8 桁）：10583346

（2）研究協力者

研究協力者氏名：ROESLER, Christian

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。